

賛美歌が聞こえる（女神転生IV）

アズマケイ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

女神転生IVのお姉ちゃんについて

目  
次

讃美歌が聞こえる（女神転生IV）

第2話  
第3話  
第4話  
第5話  
第6話  
第7話

45 38 31 22 14 8 1

## 賛美歌が聞こえる（女神転生IV）

戦いに倒れたる者よ 案ずるな

また新たな光が 汝を護らんがため  
やつて来る……

さあ 陸へ戻られい

再び立ち上がつた時 汝は光の力もて  
生まれ変わるのだ……

21位世紀初頭、南極に突如シユバルツバースと呼ばれる謎の巨大空間が出現した。あらゆる物質を飲み込み、拡大を続ける超常現象の驚異になす術はなく、事態を重く見た国連は、有人探査機を送り込む最終プランを決行。シユバルツバース調査隊を設立する。国連が組織した調査隊の一員として、人類の命運を担つた旅に、チカの両親は医療チームの一員として選ばれた。4隻構成の最先端揚陸艦隊の1号艦レッドスプライイト号に搭乗し、同じ日本国籍のクルーとしてタダノヒトナリと共に調査に向かつた。残念ながら帰還したのはたつた1隻だった。殉職したゴア隊長の意志を引き継ぎ、帰還したタダノヒトナリを中心としたレッドスプライイト号のみである。その後、シユバルツバースを縮小させる計画は順調に進行し、世界の危機は去つたかに見えた。

しかし、帰還したレッドスプライイト号に乗つていたはずのクルーの中にチカの両親の姿は無かつた。女子高生のチカと中学生の弟を残して両親は殉職したそうだ。二人は母方の祖父母に引き取られた。今まで住んでいた家を引き払い、吉祥寺にある開業医の家に引き取られ、なに不自由ない生活を送つていた。医師である祖父、看護師である祖母に触発され、看護師の道に進むことに決め、進学校と塾の往復をする日々を送つていた。センター試験を間近に控えたある日のこ

と、チカは弟から驚きの情報を聞かされる。

品川にできた教会に両親によく似た人を見かけたというのだ。半信半疑だつたが、反抗期を迎える間もなく両親が亡くなり、感情をぶつけられる家族が姉しかいないはずの弟がこれだけ必死に訴えてくるとなれば無碍にできない。チカは弟と共にその教会に出かけた。宗教には詳しくないチカだつたが、近所の評判を見るに怪しげな新興宗教ではなさそうだった。

救世主の出現を信じており、その力によつて世界が救われることを待ちわびると謳つていた。信じる者はみな救われると代表の男はいつた。秩序を重んじ、すべては法の下に管理されるべきである、と。物静かな態度で慈悲深い男だつた。好奇心から訪ねてくるチカたちのような子供にも紳士的に教えを説くような口調で応じてくれた。みな、白地に青のラインが入つた服装で統一されており、階級によつて服飾が違うようだが、弟がいうような服の男女は見つけられない。男にも聞いてみたが、両親によく似た風貌の信者はいないらしい。悩みがあるなら相談に乗る、とセラピストのようなこともしているらしい男に名刺をもらい、その日は帰つた。

賛美歌が聞こえた。

それから5ヶ月後。受験を見事勝ち抜き、第一志望の大学に進学したチカは、一人暮らしをはじめた。初めてのゴールデンウイーク、弟が宿泊代を浮かすために泊まりにくるというので、久々にたくさんのお買い物をした。荷物持ちの弟は、世間話で奇妙な話を教えてくれた。タダノヒトナリさんが家に訪ねてきたという。なんでも弟が両親に似た新興宗教の信者を見たという話を聞いて、飛んできてくれたらしい。根ほり葉ほり聞かれた弟はその真剣さに当惑しながらすべてを話した。そしたら、ひとこと、忘れろと言われたらしい。そして、二度と教会に近づくなとも。根拠はないけれど、あの宗教団体はきな臭

い噂が流れていると教えてくれたようだ。近頃、未成年の子供が行方不明になる事件が多発している。最後の目撃証言は必ず品川、もしくは白い布地に青のラインが入った人間がそばにいた。

「姉ちゃんも一応女なんだから気をつけるよ」

「一応つてなによ、一応つて。失礼ね」

「彼氏の一人や二人いれば安心なんだけどな、いねーだろ、どうせ」

「うるさいわね、アンタに言われたかないわよ」

「どーだか。姉ちゃん、女捨ててるもんなあ。弟ながら心配だぜ。一人暮らしなんだしさ、ちゃんと鍵かけろよ? 最上階だからつて窓あけっぱなしにするなよ?」

「やーね、かけてるわよ。バカにして」

「うつそつけー。いつもばーちゃんに怒られてた癖に。一人暮らしひなつたらますますしないんじゃねーの?」

「それはアキラもでしょ?」

「僕はいいんだよ、まだ実家暮らしなんだから」

「ねえ、頼むからどつか別の学校に進学してよね、アキラ。万が一、私の家に近くになろうものなら、一緒に住まなきゃなんないんだから」「うげつ、それほんと? 勘弁してよ、なんで姉ちゃんと」

「仕方ないじやない、おばあちゃん達がそのつもりなんだから」

「うわー、まじか。そんなの聞いてないよ」

「つーかさ、そもそもアキラは将来とか決めてるわけ?」

「ぜーんぜん? だつてまだ15だし」

「そうよねー、まだ15だもんね、アンタ。これからか

「姉ちゃんは?」

「なんで姉ちゃんは看護士になろうつて思つたんだよ?」

「そーねえ、やっぱおじいちゃん、おばあちゃんの影響かな。あとはお母さん。大変そうなのは見てたはずなんだけどね。タダノさん、言ってたじやない? 生きて帰れたのは、お母さんたちのおかげでもあるつて。いざいなくなつてみるとやっぱ、あこがれちやうんだよね」

「え?」

「ふーん、そつか。ま、がんばれ」  
「なにその上から目線、むかつくー」

けらけら、とチカは笑う。アキラはつられて笑った。今日は久しぶりにチカのオムライスが食べられる。それがなによりも楽しみだつた。これが最期の会話になるなんて、誰が思つただろうか。

宇宙を含めたすべての世界の創造主は、今日に至るまで明確な意志を示してはいない。そのため、救済という言葉に対する解釈は、配下であるはずの天使たちの間ですら齟齬が生まれていた。世界は人間が治めるのが神の意志であり不干渉であるべきなのか。人間を徹底的に管理するのが神の意志であるのか。アゼルは後者から前者に鞍替えした墮天使の一人である。

鞍替えするきっかけは、地上に降りたとき出会った一人の女だ。まだこのときアゼルは人間を神の望む姿に作り替え、選ばれた人間のみが永久に生きる国を作ろうとした大天使の勢力に組みしていた。無垢な子供を選別し誘拐するために地上に降りた。グリゴリという天使の集団を率いて、表向き新興宗教という形で品川に根を下ろした。シユバルツバースで人々の意識を根本から作り替える贊美歌の蓄音機と化したロシアの女を教祖として水面下で行動した。贊美歌を聞き取ることができるのは、無垢なる魂を持つ、選ばれる資格がある人間だけだ。反応を示した子供を中心に誘拐し、地下施設で秘密裏に建造していた繭と呼ばれる箱船に押し込めた。その中に入つた人間は問答無用で肉体改造が施され、自我を持つことができなくなる。神を盲信する人間ができる。体が作り替えられる間、動力源は天使の力で

ある。必要な人数がそろい、教会からうちあがつた箱船は空高く舞い上がる、選ばれなかつた人間を根絶やしにするため、某国から核兵器が打ち落とされた。ある少年が自らの体を生け贋に捧げ、その殲滅から免れるべくすつぽりと東京を岩で覆い隠してしまうという誤算があつたものの、繭は無事にその岩盤の上に着陸した。長い時間をかけて作り替えられた人間は、文明を放棄し、かつての原始的な生活にもどるべく、選ばれた始まりの民として繭から出された。

アゼルは女と再会した。

赤子のように無知で、無垢で、真っ白な人間の中で、驚くべきことに女はまだ正気を保つていた。異分子は排除されるべきだ。不幸にも選ばれていながら神の御心に沿うような人間に生まれ変われなかつた人間である。哀れみをもつて彼らは処刑されていった。女を誘拐した張本人であるアゼルは、つまらない人間になつてしまつた者達に違和感を覚えていたものだから、その変わらぬ姿に歓喜した。そして、惜しいと思つた。捨てるのならいつそのこと自分のものにしたいと思つた。そしてアゼルはアザゼルに堕天したのである。にも関わらず、アザゼルが未だに天使勢力にいられる理由は、四大天使と敵対しながらも背反した思想から神の意志を示そうとするマンセマットの配下に下つたからだ。マンセマットは大天使でありながら墮天使や魔神の軍勢を率いている。人間を誘惑し、迷わせる試練を与えることで神への信仰を示そうとする特異な天使なのだ。アザゼルのようになつて墮天した者はほとんどが四大天使によつて殲滅され、生き残りのほとんどはルシファに下つたが、そのうち1割は神に進言したマンセマットの温情により生き残り、配下に加わつた。

マンセマットはアザゼルの率いた天使部隊グリゴリが墮天したことを探査はすれども、女と結ばれたことを咎めはしなかつた。女が住んでいた吉祥寺の真上に村を作り、そこでひつそりと一生を終えるまでそばにいても、なにも言わなかつた。ただ意味深な笑みを浮かべて

いただけである。

「俺を見ろ、チカ」

もつとも、望まぬ婚姻を強いられたチカにとつては、たまたものではなかつた。新婚の簡素な邸宅にはいつも静寂があたりを包んでいた。抗議の意志を示すべく目をそらした瞬間、顎を掬われる。天使には言霊による拘束が容易だと悟つてから音を発さない誓いを立てたチカは息を呑む。流ちような英語はわからないが、日本語に精通するアザゼルの言葉は他より強烈だつた。無性に懐かしくなつて泣きたくなるのだ。この国に日本語はない。ケガレビトの言葉だと使うことが禁止されている。目尻が潤むチカを見るたびに、アザゼルはいつもひどくうれしそうな顔をした。不安をあたり立てる。手首を捕まれ、傾いた体を受け止められ、口づけられる。のどが鳴るのがおぞましい。鳥肌が立つ。アザゼルはいつこうに構わないようだつた。

墮天したにも関わらず、アザゼルはかつての天使になるのを好んだ。マンセマットの配下に下つたのは、天使の姿を剥奪されるのを恐れたのかもしれない。墮天したことで得たおぞましい本性を現せばチカは抵抗しようがなくなるというのに、何故かアザゼルはそれをよしとしない。誘拐した犯人としての天使、もしくは相談相手として淡い恋心を抱いていた新興宗教の男、そちらの方で対面した時に見えるチカの反応を特に好んでいたようだ。

人としてのアザゼルはおぞましいほどに美しい男だつた。この国の公用語である英語で表現するにはチカは少々学がなかつた。その事実を恥じてしまうくらいには妖艶で、玲瓏な美青年だつた。同時に恐ろしい男だつた。いつもするりと心の中に入り込んでしまうような雰囲気がある癖に、その瞳の奥には人間が欲望を解放することを是とする矛盾した信条がある。人好きのする穏やかな笑みをたたえていながら、チカが抵抗するのを待ち望んでいる。

離して、と腕を突つ立つてると、アザゼルの瞳に濁流のような高ぶりがちらついた。怒りでもない、悲しみでもない、それはいつでも楽しげにゆがんでいた。

「確かにこの世界は俺たちの存在を否定する、輪廻転生の理で成り立つてやがる。お前が俺から逃げるつていうんなら、やつてみろ。だが、忘れるなよ。俺は必ずお前を見つけて、ここに連れ戻してやる」

女を翻弄し、陥落させることに慣れきった堕天使の戯言である、とチカは聞き流すことができない。恐怖に染まる衝動のまま、チカは走り出す。どこにもいけないまま、連れ戻される毎日が繰り返された。ただの人間にすぎないチカはアザゼルが張つた結界を突破することができないのだ。

チカが最期に見たのは、弟と共に見上げた時と同じ、澄み渡る青空だつた。

時が流れ、アキラが天井に到達したとき、すでに時間は300年近く経つていた。チカが残した子供の末裔と初めてあつたとき、アキラは天使に管理された国を人による国に変えることを決意する。いつか再会することを夢見て悪魔討伐隊と別れ、仲間数人と悪魔を退治する部隊を組織することで悪魔召還プログラムの剥奪を免除。天使討伐をうちに秘めつつ、国の中にとけ込んだアキラはその代表として頭角を現すようになつていく。マンセマットと通じ、人間による統治が神の意志だとする勢力に組みすることで、四大天使を排斥、封印することに成功する。東のミカド国はこうして建国され、人による統治が始まろうとした矢先、封印を免れた大天使の一人に暗殺され、短い生涯を閉じた。アキラが最期に見たのは、青空。広がる岩盤、そして近づいてくる懐かしい東京のネオンだつた。

## 第2話

201x年、東京を未曾有の惨禍が襲つた。突如現れた悪魔の大群、それを利用して日本を変えようとした女、それらを強引に解決しようと東京に打ち込まれた核兵器。奇跡が起こり、空が岩盤に覆われ、人々は辛くも核の脅威から救われた。しかし、悪魔と共に幽閉されてしまった人々は、地下での生活を余儀なくされる。

そして時は流れ20XX年。湾岸エリアとよばれる場所がある。かつて行政、商業、文化などの広域的な拠点として栄える中心地の一つだつたが、悪魔が跋扈する無法地帯と化していた。隆起した岩盤が北東に迫り、南西は海。公共機関が破壊され、老朽化が進む一方の海上を走る道路と地下鉄を徒步で移動しないと他のエリアに行けない湾岸エリアは、まさに人工の孤島である。悪魔の軍勢が襲いかかつたときの惨状は25年たつた今でも残されたままだ。下町情緒の残る古きよき江戸の風情と、新しい町並みが混在し、高層マンションが映えた町が荒廃するのはやかつた。人がいない町は風化するのも早いのだ。

人間がいなくなつた町は、もともと悪魔しかいない有様だつた。しかし、スカイタワーを天使勢力が占拠したことと、もともと住んでいた悪魔は追い出され、ここに流れ着く。口を重ねるにつれて悪魔が増えすぎて蟲毒状態となり、おぞましいほどに強い悪魔が跋扈するようになった。彼らの影響で南砂町全体が人間にとつて猛毒に汚染されてしまつてゐる。かつて4万人もの人間が住んでいたとは到底思えない有様である。25年前に放棄されたこの町は、風化していく一方だ。そんな、人が住めない土地となつてしまつた南砂町にも関わらず、ターミナルは設置されている。主な利用者は高レベルの悪魔を退けることができる腕利きの人外ハンターだ。使い物になりそうな物資を探しにやつてくるのだ。早々に放棄された町には、慢性的な物資不足に悩まされている東京の人々にとつて、ある意味で宝の山なので

ある。

かつて南砂町駅と呼ばれたターミナルの設置されている地下鉄の一角に、職員が休憩所としていた部屋がある。そこだけ人の生活があるのは、あまり知られていない。大型ショッピングモールから拝借してきたもので埋め尽くされた快適空間の中心で、毛布に包まれている固まりに近づく影がある。

「ミヤコー」

てほてほと真っ赤な長靴をならし、二足歩行の猫が体を揺らす。まだ寝たいと反対側に寝返りをうち、うずくまつてしまつた彼女に、頬を膨らませた猫は、てえいつとその上に乗つかつた。短いうめきが聞こえる。重いから退いてくれとのばされた手を器用に避け、無駄なステップを踏みながら彼女の名前を呼ぶ。

「ミヤコー、ミヤコー！おいら、オナカ減つたゾー！なんか食わせロー！」

赤い羽付きの帽子からのぞく耳が彼女の言葉を聞き取り、むううと猫は口をとがらせる。赤いマントを翻し、サーベルをならし、愛らしい猫の騎士は駄々をこねる。

「やだー！やだー！はやく、はやく、ミヤコー！おいら、オナカ減つて死んじやうゾー！おいらが死んじやつてもいいのかー？」

わめき散らす仲魔の声に寝たふりの限界を感じたのか、もぞもぞして固まりが動き出す。猫の魔獣は、にひひと笑う。

「おつはよう、ミヤコー！」

抱きついてきたおませさんを受け止めて、まだ寝ぼけ眼の彼女は大きくあくびをする。

「おはよう、ケットシー。どこからスリムになりたい？」

抱いていないと眠れない鉄のお守りがケットシーの喉をくいとあげる。銃撃が弱点のケットシーはそのままざしが本気だと悟って、大慌てでミヤコから離れて、距離をとる。反射的に近くの棚の上まで駆け上がった魔獸は、ぶわっとしつぽを逆立てた。

「えええっ!?なんでだよ、ミヤコー！プリティーでラブリーなおいらになんて言う仕打ち！ううう、ミヤコのいじわるううう」「どこが意地悪か教えてくれない？ケットシー。普通に考えてアタシの方が被害者でしょ。そしてこれは正当防衛、はい無罪」

「ぜつたい違う！っていうか、悪魔の襲撃心配してるの、ミヤコ？え？大丈夫、大丈夫、ミヤコがおいらを守るから！」

「やっぱ昨日精靈にしどきやよかつたわね、失敗したわ」

「いやだー！おいらはもつとかわいい悪魔と合体したいんだよう！よりによつてショウジョウなんてやだーつ!!ドアマースがいいーつ！」「あははつ、ドアマースなんて使うわけないでしょ？もつたいない」「やっぱり宝石店と交換する気満々じゃないか、ひつどい！」

ミヤコはスマホを取り出した。新品なのは、先日、銀座にある宝石店にたっぷり精靈を持ち込んだ時に、いつのまにかスマホを落としてしまったからである。予想外の出費だったので、ほしい装備が買えなかつたのだ。それを根に持つミヤコのまなざしに、ケットシーは涙目である。たくさんの悪魔を合体させ、精靈アーシーズを作りだし、当時カーシーだつた彼で精靈合体したことでの、低レベルにはあるまじき性能を持つケットシーは誕生した。なんでも召喚にかかるマグネタイトの消費を極力抑えたいそうである。非常に手間をかけて満足いく性能を出すのに数日かかったのは、カーシー時代の記憶からわかつ

ている。護衛もかねているが、ケツトシーから言わせれば自分はいろいろなぐらい、ミヤコは腕の立つ人外ハンターである。

「アゼル」

ミヤコはスマホに入れているA-Iを起動させた。

『なんだ、マスター』

「邪教の館起動してくれる?」

『了解した』

「やつぱり悪魔合体する気なんだ!? ガーネットかアメジストかパールと交換しちゃうんだー!? ミヤコの鬼! 悪魔! 人でなし!」

「いい加減黙ろうか、ケツトシー。本氣でショウジョウと合体させるよ?」

「それだけはいやーっ!」

さめざめと泣き始めたケツトシーだったが、ミヤコが振り向きもせず簡易キッチンにいこうとするので、大慌てでおいかける。マグネットイトの供給は充分なのだが、好奇心旺盛なこの悪魔、興味津々なのである。昨日ショッピングモールから調達した缶詰をあけ、なにが入っているのかわからぬ紫色のパンに挟んで食べる。あいにくこの食生活が人々に定着してから生まれた世代だ、飽きたとは思うが悲壮感はない。人間の食べ物に興味津々のケツトシーは、ペロつと平らげてしまつた。ミヤコがおいしそうに食べているから、これが人間にとつてはおいしいんだろうと考える。個人的には一昨日のチュパカブラの唐揚げの方がおいしかったけど。それを告げると、ミヤコはないわーと首を振つた。まだまだ人間はわからないことが多い。

「今日はなにすんだ、ミヤコー? おいら、いっぱい活躍したいゾ!」

「ちよいまち、調べるから。アゼル、クエストなんか来てない?」

『ああ、人外ハンター商会から依頼が来ているな。ルフとアンズーの

定期調達、アルラウネの果実の納品依頼が3件。個人からはサンジエルマン伯爵から宝石の納品依頼もある』

「代わり映えしないわねえ。なんかおもしろいのない?」

『面白いのと言わてもだな、マスターが拠点を変更しない限り、難しいだろう。南砂町の依頼を迅速にこなせるのはマスターだけだからな』

「ま、そうなんだけどね。さて、どうするかなあ。たまには気分転換に討伐依頼でも受けますか」

「おおつ、おいらのデビュー戦!」

『それならちようどいい依頼がきたぞ、マスター。少々変則だが』

「お、いいね。どんな依頼なの、アゼル?」

『人外ハンター商会の仲介屋からだ。南砂町の南の方角に、不自然な空間のゆがみが発生したらしい。南砂町は今悪魔の蟲毒と化しているから、どんな悪魔が生まれてもおかしくはない。今、フリン奪還に向けて多くのハンターが動いているため手が空いているハンターが不足している。一体なんの異変なのか調べてほしいとのことだ。前金で6万マツカ、出来高で追加報酬を払うそうだ』

『そりなんだ?たしかにこの時期だし、不安材料は消したいわけね。了解。というか、そのどこが変則的なわけ、アゼル?よくある話じゃない』

『この依頼はマスターだけでなく、もうひとりハンターがいる』

「ああ、なるほど?チーム戦つてこと?まあ、一人で行つて帰つてこないよりは賢明よね』

『マスターにはガイド分の追加報酬も含まれているそうだ』

『ここに初めてくるハンターつてこと?なんで?普通、ここに慣れてるハンター派遣するもんじやないの?』

『依頼者は人外ハンター商会だ』

「直々の割に中途半端な依頼ねえ。その他のハンターつて誰?』

『数日前に登録したばかりだが、フリンを上回る勢いでランキングを駆け上がっている《期待の新人》だ』

『それってクリシユナ復活させたっていう新人君?ダクザとかいう魔

神に憑かれてるつてもっぱらの噂の?」

『そうだ』

「あー、了解。つまり監視役になれと」

『そういうことだ』

「本部直々の依頼じゃ断れないじゃない。わかつたわ、受けるわよ」

ミヤコは先行きが不安なのか、ためいきをついた。

### 第3話

これはまた尖つた子が来たなあ、とミヤコは思つた。緑色の螢光塗料の入れ墨に似たデザインの身体は、やせて頼りないラインにひどく不似合いだが、よく見ればカサブタだとわかる。魔神と取り引きして黄泉がえりの力を得た少年に流れる血潮は悪魔と同じ緑の螢光色なのだ。致命傷を負うたび蘇生するのは魔神の加護があつてこそ、ふさがれた怪我の数だけ発光する箇所が増える。ぼろぼろに傷だらけの手をみて、ミヤコは目を細めた。くぐり抜けた修羅場の数を物語つてゐる気がしたのだ。

1週間もたたずに名をあげた将来を渴望されたハンターは、今や人々の恐怖と嫌惡の対象だ。なにせ悪魔と天使を退け、最終決戦に臨もうとしていた英雄を誘拐した第3勢力の封印を、騙されたとはいえば解いてしまったというのだから。戦犯ものである。しかも魔神はその第三勢力に組みした疑惑があり、少年はすでに死んだ身であり魔神に生かされている。裏切り者と断罪するには状況がそろいすぎていた。

処刑されずに済んでいるのは、今、東京はその第三勢力によつて悪魔召喚プログラムそのものが利用できない上に、ターミナルで転送移動できなかからだ。人間は悪魔を利用して悪魔に対抗している。そのハイテクがなければただの人なのだ。皮肉にも魔神のおかげで悪魔召喚プログラムを使える唯一の人間となつた彼は、こうして状況の打開に向けて東京を奔走しているらしい。やけに眼孔が鋭いのは生まれつきか、それとも悪魔の影響なのか。そのわりに仲間がいない。事前情報では阿修羅会の少年と十字軍の隊長、幼なじみの少女、そしてミヤコもよく知るノゾミがいるとのことだつたのだが。ここにいるのはナナシひとりだ。アゼルの言うとおり、ひとりのハンターしかいない。これが人外ハンター商会の出した条件なのだろうか？そんなバカな、上層部がそんな軽率なことをするわけがない。

瞬き数回、じいつとこちらを見上げてくる少年は、大きく目を見開いているので、首を傾げる。ミヤコはナナシとは初対面のはずだ。驚いているのはわかる。待っているのが女のハンターだと思わなかつたのかも知れない。

「初めまして。アタシはミヤコ。ここ、南砂町を拠点に活動している人外ハンターの端くれよ。どーぞよろしく」

差し出された手に視線を落とした少年は、相変わらず拳動がおかしい。

「ん？ どしたの？ なんがあつた？」

「…………なんでもねえ。コンゴトモヨロシク」

「ん、ヨロシク」

遅れて交わされた握手である。

「この子はケツトシー。ちゃんと強化してあるから安心して頂戴。このあたりの悪魔なら立ち回れるから」

「よろしくだぜ、ブラザー！」

「ふ、ぶらざー？」

「ミヤコのぱいおつが気になつちやう年頃なんだろ、怖い面のにーちゃん！」

「こわいつらつて……つ、つーかなにいつてんだよ、この悪魔！ やな悪魔だな！」

「あははっ、ノゾミで見慣れてるんじゃないの？ すいぶんと女の子多いメンバーミたいだけど」

「ちよ、アンタまで、なにいつて！」

「耳までマツカだなーもしー」

「あーもううるさい、黙れ！」

「ちなみにミヤコのスリーサ」

「あ、黙らせたいときには銃撃が必須なのよ、この子。弱点だからね」「まさかのフレンドリーファイアーラー!?ミヤコつ!?!」

「調子に乗りすぎなのよ、ケツトシー。少し黙つて」

「あい」

長靴を履いた猫は大人しくなる。息を吐いたミヤコは笑つた。緊張がほぐれたのか、調子を取り戻したらしいナナシはばつ悪そうに目をそらす。不機嫌そうに口元がゆがんでいた。がしがし頭を搔いて、ナナシはミヤコを見上げる。

「・・・・・よろしく」

「うん、よろしくね。早速なんだけど、ナナシ。聞きたいことがあるんだけどいい?みての通り、こここのエリアは毒が土壤にしみこんでる状態なわけだけどさ。毒を軽減できるアプリはもつてる?」

ナナシは首を振つた。

「ダメ半減はできるけど、無効まではとつてねえ」

「ならアタシのポイントあげるから、とつといてくれる?こここの土地、ぜんぶ毒で汚染されてんのよ、豊洲みたくね。道具がもつたいないしさ」

「ども」

「どーいたしまして。ダグザつて魔神がスマホを管理してるでしょう?なら、これ、アタシのね。使つて」

はい、とミヤコはスマホを渡す。ナナシが腕につけているスマホは、ミヤコが以前使つていて銀座で落としたスマホとよく似ていた。どうやら最近の新人ハンターはいいものをつかつてているようだ。あるいは期待の新人に誰かがあげたものかもしれない。ミヤコのスマホはあそこまで新品同然じゃなかつた。使い込んでぼろぼろだつた。すべての技術が25年前でとまつているこの世界で、新品同然のスマ

ホがどれだけ貴重かはいうまでもない。よっぽど期待されているようだ。そんな中のダグザの判明とやらかした事件の衝撃はさぞ大きかったに違いない。ミヤコからスマホを渡されたナナシはダグザを呼び出し、転送の手続きをする。

「どうでさ、ナナシはどんな戦い方が得意？魔法？物理？」

「魔法。どうしようもないやつは、こいつで殴るけどあんま期待できねえ。アンタは？」

「アタシも魔法なのよねー。補助が中心だけど。あとはこの子ね」  
ミヤコは使い込んでいる銃をナナシに見せる。女性が扱うにはあるまじき重量と威力が出そうな見た目をしている。ナナシの頼りない体つきから繰り出される斬撃よりは威力がありそうだ。脱いだらすごいんだぞと言うケットシーのしつぽを踏みつけながら、ミヤコは思案する。

「アタシとケットシーが前張った方がよさそうね。ガイドもかねてるし、後ろは任せたわ、ナナシ」

「おう」

「聞き分けがいい子は好きよ、アタシ」

「子供扱いすんなよ、オレもう15なんだけど」

「え、そうなの？ごめんね、てつきり12、3くらいかと」

「どうせ低いよ、ちつ」

「ごめんごめん、拗ねないで。チャクラドロップあげるから」

魔法と素早さに特化して鍛錬している少年特有の体つきである。攻撃や銃撃に重点を置いたトレーニングはどうしても体格に差が出てくる。コンプレックスを刺激されたナナシはますます拗ねてしまう。年齢相応な反応にちょっと安心したミヤコは笑ってしまう。ナナシはじと目でミヤコをにらむ。

「だから子供扱いするなつての」

「ごめんごめん、許して。というわけでお詫びの印よ、受け取つて。  
期待の新人君の活躍に期待してるわ」

「しかたねーな」

ナナシは皮袋を受け取つた。ここから先は長いのだ。魔法攻撃が得意ではないミヤコにとつて、ナナシの魔法は頼りになる後方支援になるだろう。いつもアイテム頼りなミヤコにとつては、魔法攻撃を石に頼らなくて済むだけで安定感が違うのだ。ん、とスマホを返され、受け取つたミヤコはポイントがちょうど減つているのを確認する。反抗期に入りたてなのか、やけにあたりが強いが根はいい子なのだろう。無駄にポイントが減つてないあたり几帳面なようだ。

「ところでノゾミたちは？」

「悪魔呼び出せない奴が行つたら死ぬつて、白い奴に止められた。仕方ねえから、他の奴らはみんな錦糸町に行つた」

「しろいやつ？ なにそれ」

「アンタ知らないのか？ こ、結界が張つてあるんだ」

「結界？ ああ、ターミナルとか、悪魔召喚プログラムが使えないとか言うあれのこと？」

ナナシはちげーよと首を振る。しかし、アサヒやガストンが見えていなかつたことを思い出し、普通の人間には見えないやつなんだどうと思いつかし、疑問符が飛ぶガイドに間違えたと訂正した。ダグザがいには未練を遺した思念体、ナバールみたいに実体化もできず寄り集まつて塊になつている靈体の坩堝みたいなやつらしい。気づかない人生ならわざわざ氣づかせる必要はない。ナナシの視線はケツトシーエーへ向かう。不思議そうにケツトシーエーはナナシを見上げる。

「なんでこいつ召喚できてんの？」

「もともと召喚してたのよ。護衛もかねてるからね、こいつ」

「じゃあ、アンタも悪魔召喚プログラムは使えないんだ？」

「まあね。でも、仲魔はいなくても大丈夫よ。自分の身は自分で守れるわ。だてにナナシのガイドする訳じゃないしね、期待してて」

「ふーん」

「あ、信じてないわね。ま、いいわ、いきましょ」

ミヤコ達は南に向かつて歩き出した。悪魔の気配がする結界を突破すると悪魔の軍勢が押しかけてきた。

『だ、大丈夫なのかね、君！ここは一度退却した方が！』

『バカ言わないの、逃がしてくれるとと思う？』

『ナナシに言つてるんだ、きみじや・・・つて聞こえるのか！？』  
「聞こえるもなにも見えるわよ、さつきから黄緑の発光体が飛んでるなあつて」

『人を人魂みたいに言わないでくれないか！』

「似たようなもんでしょ、幽霊君」

『私にはナバールという名前があるのだ、幽霊という名前ではない！』

「ナバールねえ。ナナシ、アンタ、変わった仲魔つれてるわね。そいつの好きなの？」

「は、まさか。ナバールは悪魔じやない。幽霊だ」

「あれ、じやあ、憑いてるの？それはまた。アンタつて変わった奴に気に入られるタチなのね、なるほど」

「うるせえ、ほつとけ」

ミヤコはナナシを見る。茶番に興じてくれるわりに、周囲への警戒は怠らない。これは将来有望な新人君だ、恐ろしくなるほどに。

「ナナシ、炎が全体に届く魔法ある？」

「ああ、ある」

「なら期待してるわね」

ナナシはうなずいた。

『マスター、俺を呼べ』

「もちろん。アンタの力を借りるわよ、アゼル」

『ああ、好きに使え、我がマスター』

ミヤコの雰囲気が一変する。禍々しい光が大地に走り、魔法陣が浮かんだ。

### 『イビル・トランス』

無数の瞳から光が放たれ、すべての悪魔を貫いた。あたりには時計の針の音が心臓の鼓動のように響き渡る。

『小僧、焼き払え。小娘が爆弾に変えた奴らをな』

これは例の魔神の声だろうか。アゼルと同じくスマホに住んでいるようだ。ナナシは頷いて、スマホに呼びかける。

「こい、アエーシュマ！アギダイン」

あたり一帯には内側から弾け飛んだ悪魔の断末魔がこだました。ミヤコは驚きの眼差しをナナシに向ける。

「久々だな、小娘よ」

「アエーシュマ！アンタがいるつてことは、やつぱりナナシのスマホ、アタシが落としたやつなのね！」

「ああ、だが此奴が我が主だ。悪く思うなよ」

「ま、まあ、それはいいわよ。悪魔全書から分霊また呼べばいいんだし。しつかし、奇妙な縁もあつたもんねえ」

「これ、アンタのだつたのか？」

「そうね。なんか新しくなつてるけど、もういいわ。好きに使つて」

「わかった。… その、ありがとう。これのおかげで助けられた」「ん、どういたしまして。さあ、例の歪みに行きましょうか」

「おう」

アエーシュマが使えるということは、ナナシはミヤコの考へる以上の力があるのだ。これは期待できそうだ。ミヤコは前を見据えた。次こそはターンを回してくれとふくれつづらのケットシーをなだめながら先に進んでいく。

## 第4話

ナナシは神殺しになる数日前から不思議な夢を見るようになつていた。

ある時はツギさんと共に悪魔に取り囲まれた中、大立ち回りを演じる。フリンに親しげに呼びかけられ、手を取ろうとする。キヨハルと共に姉を捜す。巨大な繭を必死でかき分け、ケンジと中にいる誰かを助け出そうとする。共通点はアキラと呼ばれており、ナナシもそれを当然と受け止めていることだ。いつも目覚めるたびに感情を高ぶらせ、ナナシの体を緑に輝かせた。

ナナシは複雑である。アキラは人外ハンター商会のタブーなのだ。人外ハンター商会を立ち上げたツギハギたちの友人であり、若くして悪魔討伐隊に入隊したという少年。25年たつのに悪行はよく知られている。スカイタワーをひたすら登るというシンプルな考えを提唱した人間だった。東のミカド国と東京がつながるトンネルを造る計画の第一人者として、ツギハギたちと空を目指した。一度は岩盤の上に到達したところまでは評価できる。問題は天使たちが東京の人間をケガレビトとよび、東のミカド国と交流することに激怒し、殺戮に走ったとき、撤退するツギハギたちに刃を向けたこと。要するに裏切り者の代名詞なのである。ナナシがダグザの件やクリシユナの件が露見したとき、真っ先に言われた言葉でもある。ナナシは連日のようにみる夢のためか、どうにもアキラが裏切り者のようには思えない。なにより、ツギさんと呼び始めたのがアキラであり、人外ハンター商会の創立者であるツギハギがハンターネームであり、本名ではないと知つたあたりからそれは確信があつた。

出頭命令が出て、ツギハギたちと対面したとき、それは確固とした事実としてナナシの前に現れた。ツギさんはツギハギだ。だいぶん年を食つてはいたが、間違いなくツギさんだつた。さすがに口には出

さなかつたが、ツギハギたちの言動がナナシを見た瞬間に一変したのは間違いない。仲間たちははずいぶんと辛辣に当たると戦々恐々していたが、ナナシだけは受け取り方が違つた。彼らはナナシの向こうにアキラを見ている。それだけ似ていたのかかもしれない。初めて出会つたのはナナシと同じくらいだそうだし。ツギハギたちから向けられたのは、長きにわたる修羅を共にくぐり抜けた戦友同士だからで、きる苛烈な問答だ。容赦なく向けられる言葉の刃、期待しているのはおそらく、ツギさん、もしくはお久しぶりです、そういうつた一言だった。

正直、ナナシは不愉快だつた。アキラはおそらくナナシにとつてもつながりが深いのだ、間違いくなく。何度も実体験として夢を見ればイヤでもそれは思い当たる。でも、ナナシはナナシである、アキラではない。まして、悪魔討伐隊としてツギハギたちと共に東京を守ろうと奔走した少年ではない。あのとき、あの瞬間が初対面だつただのだ。人外ハンター商会の創立者としてあるまじき態度である。ナナシの評価はそこにはなかつた。アキラとしての過去が間違いくなく過大評価を生んでいた。誰もナナシをナナシと見てくれなかつた。不愉快でたまらない。アキラはナナシにとつて、所詮踏み台となるべきものでしかない。利用するものはなんでも利用するのだ、ダグザの神殺しとして契約したのも、クリシユナの封印を解いたのもすべては同じ。ナナシのことを認めさせるための足がかりでしかない。ダグザは他者に依存するなどバカバカしいと一笑するが、ナナシにとつては自分がここにいると知らしめることは命題だつた。

孤児で名前がわからないからナナシと自分でつけたのだ、物心つく前の子供が。周りがミナシゴとかナナシノゴンベエとかいうから、それが自分を示す名前だと勘違いして。名前は、とどうちやんと呼ぶことになる人に聞かれたとき、ナナシと名乗つて驚かれて初めて自分の名前ではないと知つたのだ。その衝撃と惨めさと言つたらなかつた。もうナナシにとつて、ナナシという言葉以外しつくりこなくなつてい

たから、ナナンシでいいやとなつたのだ。名前をつけようかと提案こそあつた。あんまりだ、孤児だから、名前がわからないからナナシだなんて、引き取つた俺が笑われる。そう渋られたが、ナナシはナナシだからナナシがいいと駄々をこね、結局このいびつな名前となつたのである。そんなナナシにとつて、アキラという赤の他人と同一視して対応されることは屈辱の何者でもなかつた。ふざけるなと思つた。かつての盟友と同一視して、裏切るなよと言われたとき、怒りが爆発したのだ。

「誰と重ねてるのか知らないが不愉快だ。そんなの知るか、くそくらえ」

不思議なことにツギハギとフジワラは怒らなかつた。むしろ、裏切りませんと握手を交わすよりよほど信用できると笑つた。やられたと思った。きつとこうやつて本音を聞き出したかつたのだろう。二人の反応が歓喜に沸いていたことから考えても、きつとこの反応こそが求めていたものだつたのだろう。その誰かに心当たりがなければまず出てこない言葉もあるし、アキラと似たような反応だつたのかもしれない。脱却できない自分に嫌気がさす。それでも、ツギハギからナナシという名前は覚えておこうと楽しげに言われたとき、うれしかつた。我ながら単純すぎて笑える。すまない、と言われたとき、すつとしたのは事実だ。

ダグザに他者に振り回される哀れさを笑われたが、バツ悪くなつて沈黙を貫いた。周りの反応が一変しても、一貫して必要としてくれているダグザに協力する気でいるのは変わらないが、すかつとした。これでいい。できればもう本部にはいきたくない。そう思つた矢先、その本部連中から直々にクエストが来たのである。報酬が破格だつた。シェーラン討伐と悪魔の殲滅を前に装備を一新するには軍資金が足りず困つていたときの通知である。狙つたようなタイミングだつたから、行くしかなかつた。

そこで出会つたのがミヤコなのだ、もう笑うしかない。

ミヤコはナナシに初めてあつた対応をしたから、夢を見たことはないのだろう。ナナシはイヤと言うほどミヤコが夢の中に出てくるから知っているのだ。名前は違うけれども、アキラの年の離れた姉は間違いなくミヤコである。もしかしたら、という期待はあつた。ナナシは孤児だ。自分がどこの誰かしらない。錦糸町に流れ着いたのだ、どこの人間かすらわからない。

気づいたら一人でストリートチルドレンをしていた。遺物漁りをしてその日暮らしをしていた。悪魔に食われるか、悪い大人に暴力を振るわれるかのどん底の生活をしていたら、アサヒと出会つた。数回の交流のあと、錦糸町に悪魔がやってきてまだハンターをしていた父ちゃんに助けられたが、ストリートチルドレンの仲間はみんな食われた。アサヒの母親も食われた。父ちゃんが人外ハンター商会のバーのマスターが死んだため後を引き継ぐことになり、男手が足りないからと拾われた。それからアサヒは義理の姉か妹みたいなものだ。

そんなナナシにとって、自分とよく似た顔をしているであろうアキラの姉はかなり気になる存在だ。しかもうり二つのミヤコは、生き別れの姉かもしれないと思うくらいには期待させる人間だった。ダグザが小僧の親族かと口走る程度には似ている。しかし、今のところは全く意識していない。残念だ、とうしくなく落胆するくらいにはナナシはこのクエストを満更でもなく感じていた。フリンによく似た青年やアキラのことを考えれば、どちらも知っている人間には転生なんて馬鹿げた言葉がよぎるくらいには似ているらしい。ツギハギたちがクエストをよこした理由がなんとなくわかつた気がしたが、それに感謝するのはしゃくなのでクエストをこなすだけである。

結界を突破した先で、ナナシが見たのはなにもない新宿である。悪

魔も人間もない。ただ荒廃しきつた新宿の街並みが広がる。

### 『アキラ』

姿をとらえることができないほど、高速で動く人間だつた。いや人間というのもおこがましい、人間だつたなにか、である。

### 『アキラアキラアキラ』

ナナシは目を見開いた。ナナシはこの声を知つていてる。

### 『アキラアキラアキラアキラアキラ』

腐り落ち、ぽつかりと空いた二つの黒い穴からどろりとした黒い液体を垂れ流し続けるそれは、歩く屍というにはあまりにもオゾマシい異彩を放つ。喉をふるわせる独特な声が脳内に響く。けだるい甘さがあつた。

悪魔にエストマを命じようとするが、逃走の成功する確率は0パーセントが踊つていてる。悪寒が走る。ナナシが逃げようとすると先を潰すように放たれたどろりとした黒いものはすべてを飲み込み、黒い波紋が広がつていく。近くにいた悪魔がその泥をかぶつた瞬間、すべてが溶解した。スライムに変化し、消えていく。現界するためのマグネットイトが足りなくなつたのだ。それだけでは足りず、すべてが黒い泥の中に溶けていく。どうやらすべてマグネットイトに変換するんでもない悪魔のステップでできているようだ。一体どんなことをすればこんな悪魔ができるのだろうか。

### 『どー、どー、アキラ、アキラ、アキラ』

ずるずる、ずるずる、と声が近づいてくるにつれて、なにか重いもの引きずつている不気味な音がこだまする。ナナシはそれを知つていてる。

それは、アキラが懸命にケンジと共にかけた巨大な繭だ。真っ白な繭だ。天使が選ばれし人間だけを誘拐し、放り込んだオゾマシい機械。神の御心に沿うよう改造を施すための装置。今の東のミカド国の祖先になつた改造人間にするための装置。天使の力が動力源だつた。空高く誘拐しようとした天使たちを殲滅して繭は墜落した。そしてアキラはケンジと繭をかき分けた。誘拐された姉を捜して。そして、どうなつた？

「なにをしておるのだ、小僧！死にたいのか！」

視界が炎に包まれた。ナナシはアエーシュマの言葉に我に返る。どうやら勝手にスマホから出てきたようだ。ダグザはあきれている。黄泉がえりの力を使えば、何度も蘇生が可能だが、それを当てにして何度も死なれたら面倒だからとダグザは基本的に助言はするが手は貸さない。自分で考え、行動し、責任を持つことを繰り返し説いている。それがダグザの求める神殺しの条件だとうそぶいて。未だに神殺しの意味が分かっていないが、他者の存在に振り回されるたびにダグザの眼孔が鋭くなる。徹底した個人主義がお好みのダグザは、交渉で悪魔を引き入れること、交流を持つこと自体に難色を示している。悪魔召還プログラムがなければ人間は悪魔と対等に戦えないため渋々許している状態だ。さぞお気に召さないにちがいない、ダグザの言葉はひどく寒々としている。

女の悲鳴が聞こえる。アキラ、と居もしない誰かを捜しまわる繭と一体化した化け物は、黒い液体を垂れ流しながら這いずり回つていた。どうやら炎が効果的なようだ。

空気が焼かれて呼吸がままならない。立ちこめる黒煙が悪魔の位置の補足を邪魔する。濃厚すぎるマグネットイトがあたりを支配している。感覚が麻痺してぼやけてしまっていた。それを突き破つたのは、爆発的な炎だった。

ミヤコだった。

「やつぱこいつで正解みたいね。買いだめしといてよかつたわ」

炎属性を付与した特別製の弾丸によつてえぐられた跡が地面に刻まれる。すべてを溶かし、マグネットイトに変換する蟲毒の液体にも効果は抜群なようで、あきらかに蒸発しているのがわかつた。

「ミヤコー、おいらどうする？これ使う？」

「そーね、頼むわ」

「りょうかーい！殺戮だー！」

ケツトシーが斬撃を繰り出す。どうやら炎属性の効果が付与されているようで、掠つた傷口から勢いよく螢光色の縁が吹き出してい る。やつぱ悪魔と合体した剣はひと味違うとケツトシーはご満悦で ある。

「悪魔と合体……!? そんなことができるのかね!?」

「シユミットつていうのよ。まー、一部のコミュニティでしか流通し てないっぽいし、驚くのも無理ないわよね。ここで生きて帰れたら紹 介してあげてもいいわよ、ナナシ」

「へ、言つてろ」

「ほらほら、ぼーっとしてないで援護してよね、ナナシ」

「言われなくとも。ほら、退いてろ。巻き添え食つてもしらねーぞ」

「え、ちょ、容赦ないわね?!」

とりあえず、敵が近すぎる。戦闘はもつと遠くで行いたいのだ。足りない力は流れた血の分だけ供給されるダグザのマグネットイトを溶かして吸収する。ナナシの体から発光色の光がこぼれ落ちる。緑色の鮮やかな瞳が開かれたとき、砲台から火炎放射が放たれた。降り注ぐ炎に身を焼かれながら絶叫する繭の女めがけて連打を浴びせる。よく燃えているが効いている気配がない。さきほどミヤコが放った炎属性の銃撃を喰らわせたときの方がよっぽど効いていた。これは どろどろの液体の方が本体だろうか。ナナシは息を吐く。意識を集 中させる。ケツトシーとミヤコはナナシを守るように前衛にたち、攻撃を続けた。液体が蒸発するにつれて、繭の女の絶叫は小さくなる。あたりは焦げ付いた大地が燻され、焦げ臭い。

異空間を形作っている闇が見えてきた。このまま砲台を発射させ ようとしたとき、繭の女を中心に毒々しい紫が渦を巻き、そして空間 ごと世界を飲み込んだ。どうやら広域魔法である。ケツトシーの悲鳴が聞こえた。アエーシュマのうめきが聞こえる。ナナシの世界は 暗転した。またダグザの力を借りて蘇生するのか。この調子だとミ

ヤコは死んだのだろうか。舌打ちしたナナシに、ダグザが笑う。

『小娘は奇妙な術が使えるようだな』

「は？」

ガラス玉が碎け散るような、きれいな音がした。濁りきつた闇に取り込まれ、影に取り込まれていきそうになつた体が蘇生される。ナナシがよみがえるとき感じるあの感覚だ。留まつていた血の巡りが再開し、マグネットイトが隅々まで流れていき、とけ込み、一体化していく。静かだった。体の中で血液ではない何かが静かに脈動しているのがわかる。手のひらにある傷は緑色の蛍光色を発している。生命的危機になると赤く揺らめくが今は元気な証拠だ。

思わず周りを見る。ケットシーとアエーシュマがいる。無傷だ。スマホを見れば魔法力も体力も全回復しているのがわかる。てつきリナナシをかばつて吹き飛んだと思つたミヤコの体が五体満足で存在している。ただその表情は不機嫌そうだ。

「あーもー、こんなどこで死ぬなんて計算外もいいとこよ。ナナシ、今のうちに撤退しましょ、これじや埒があかないわ。あの悪魔、アタシたちが死んだと思ってどつかいつたみたいだし」

「アンタ、なにしたんだ？」

「ん？ 見てわかんない？ リカームドラよ」

「はあっ！？」

リカームドラは自らの命と引き替えに仲間の魔法力と体力を全回復する捨て身の回復魔法である。ナナシも一度、資金繰りに困り手を出そうとしたことがあるが、ダグザに黄泉がえりを拒否されそうになつたため泣く泣く止めた。リカームドラで他の仲間を回復させ、サマリカームという蘇生魔法で復活させれば簡単に全回復できるとミヤコは笑う。

「まあ、アタシの場合、アンタと違つて1回しかできないんだけどね。

下準備しないといけないから、戻りましょ」

「…………なにしてんだよ、アンタ」

「質問はあとで受け付けるわ。まずは今回わかつたことを本部に報告

するのが先よ。元手がないとね、何事も」

「おう、わかつた。あとで説明してもらうからな」

「りよーかい」

## 第5話

ナナシはミヤコの拠点である南砂町駅に戻ってきた。適当にくつろいでいて、と自室に案内され、周りを見渡す。ミヤコは一角にあるパソコンを立ち上げた。報告書を作成しているようだ。ナナシが背の低いテーブル前にあぐらをかくと、暇らしいケツトシーが構え構えと飛びかかるてくる。かれこれ30分ほど格闘していると、仕事を終えたミヤコが大きく伸びをして立ち上がった。何か飲むか聞かれて、適当に答える。

「返信が来たわ。追加報酬が振り込まれたみたいよ」

ナナシはダグザに呼びかける。今回は8万マツカである。ナナシがほしい金額にはまだまだ足りない。いつ止めてもいいし、いつ再開してもいい、とかかれているが、軍資金が足りないのは創立者側も知っているはずだ。どうする、と聞かれ、まだ金が足りねえからいる、と返した。朗報ね、とミヤコは笑う。一人でこなすには荷が重いらしい。

アサヒから現状報告のメールが届く。あちこちで地下鉄内に悪魔が入り込んでいるようで、助力を求められ、錦糸町までたどり着けないようだ。大丈夫?と心配そうな言葉が並ぶ。素っ気なく、でも簡潔に返信する。無茶はするなよ、悪魔呼び出せないんだから。ありがと、とやけにうれしそうな顔文字が返ってきた。

湯気が立つ見た目だけならおいしそうなホットココアが渡される。もちろんレプリカだ。ごぼごぼうごめき、泡立っていることを気にしなければわりといける。どのみち25年前よりあとに生まれた世代はココアなるものを飲んだことはないのだ、違ひなんてわからない。

ケツトシーがカップから逃げ出した茶色いスライムと格闘してい

る。笑いながら眺めているミヤコにナナシは言葉を投げた。

「教えてもらおうじゃねーか、ミヤコ。アンタが生き返つた理由はなんなんだ？」

「簡単にはいうと、悪魔に代行してもらつたのよ」

「なんだそりや？」

「なんでもお婆ちゃんが高校生の時、悪魔の世界に高校ごと飛ばされるつて言う事件があつたらしくてね。お婆ちゃんは数少ない生き残りだつたらしいのよ。それで、生き残れた理由がこれ。アンタは降魔つて呼んでるわ」

「（）ーま？」

「悪魔の魂を自分の体に憑依させてその能力を得るわけ。この状態で死ぬと、悪魔の能力を自分のものにして復活できるのよ」

「それつてオレと同じで死なないつてことか!? オレの場合はダグザだけど、アンタは悪魔を付け替えられるつてことだろ?」

「まあ、失うものが変わつただけよ」

「そういう家だつたのか?」

ミヤコはまさかと自嘲して首を振る。

「そうだつたら、アタシだけ生き残るわけないわ。お婆ちゃん頼つて六本木まで行けるわけないでしょ」

「ふーん?」

六本木に頼る人間がいるなら、なんでもまた錦糸町に拠点を置いているのか。ついでに両親や親類は全滅したような口振りだが、なにがあつたのか。気になりはするが、論点はそこではない。機会があればまた話が聞けるだろう。ナナシはあえてスルーした。

「お婆ちゃんが元の世界に帰つてきたらできなくなつたらしいわ。そういう家系だと思つて調べたけどこれといった謂われはなかつたみ

たい。でもまあ、適正があつたのよ、たぶんね』

そして説明が始まった。あらかじめ悪魔を守護霊として降ろしておかないと、憑依させる悪魔がミヤコの体と心を乗っ取り好き勝手してしまう。そのため守護霊の悪魔よりレベルの低い悪魔を降魔させることで未然に防ぐ必要がある。ミヤコは幸運にも悪魔に殺されかけたとき、この降魔の力が覚醒し、近くを通りかかった悪魔が守護霊になることを快諾してくれた。紹介するわね、とミヤコはスマホを差し出した。

そこには澄んだ赤紫のローブをかぶった男がいる。癖のある黒髪と黒い目をした褐色の男だ。普通の人間に見えるが背後に見え隠れる白い翼が人外だと知らせている。

『初めてまして、神殺しのナナシ。そしてダグザ。オレは砂漠の神アシズとかつて呼ばれていた者だ。信仰していた人間がいなくなつたあと、天使どもの勢力に取り込まれた際、アゼルという名に変えられた。どちらでも構わん、好きに呼べ』

『じゃあ、アンタは天使たちの勢力なのか？ アゼル』

『東のミカド国の勢力なのか、と言われればそうだと答えるが、殺戮の天使どもの勢力かと言わればそうではない。天使とて一枚岩ではないのだ、ナナシ。人間を管理すべきではなく、人間の意志に任せることこそが神の御心にそうと考えているのだ、オレたちは』

その言葉にナナシの瞳の奥が揺れる。

「一つ聞いていいか、アゼル」

『なんだ』

『ミヤコの守護霊してんのは、マンセマットの指示かよ？』

アゼルは意味深に口元をつり上げるが、真意は見えない。ただ紡が

れる言葉はとても楽しそうだ。ミヤコは不思議そうにそのやりとりを見ている。

『オレはミヤコやお前のような人間が好みでな、人が人であろうとする限りは助力することもいとわないことにしているのだ。通りかかつたのは全くの偶然だ。あの時、オレの守護するにたる人間がミヤコしかいなかつたということよ』

「どーだか」

『ずいぶんと嫌われたものだな』

『ナナシよ、オレの神殺しよ。くれぐれもこの悪魔の甘言に乗るんじゃないぞ。小娘の守護霊としてもな』

「へーえ、アタシのこと、認めてくれるんだ?」

『黄泉がえりの手間を省かせてくれた貸しはいざれ返すつもりだ。小娘どもが挑む結界の先は、どうやらその術式が必須のようだからな。せいぜい、小僧を守れ』

「いわれなくとも守るわよ。ナナシの魔法、まるで大砲みたいだつたもんね、すごい威力じやない。あれがないとあの悪魔は倒せそうにないし」

「なに勝手に決めてんだよ。オレはアンタに2度も助けられてんだ、まだ借りを返してねえんだよ。それまで死ぬな」

「死ぬなつてこれまたきつつい縛りねえ」

けらけら、とミヤコは笑う。ナナシと同じだ。臨死体験を幾度もすることでの恐怖が希薄になつていて。ナナシは唇をかんだ。不機嫌になつてしまつた理由がわからないミヤコはどうしたの?と首を傾げる。いらついたまま、ナナシはなんでもねーよと息を吐いた。

「それより、アゼルはスマホに住んでんの?よく落としたとき、こつちに置き去りにしなかつたな。アエーシュマみたいに」

「それはいわない約束でしょ?ナナシ。分霊呼び出したら、えつらい怒られたの思い出しちゃつたじやない」

うへ、とミヤコは肩をすくめた。ダグザと同じくスマホを通信手段としているが、常時憑依している状態のため脳内会話だけでも可能だ。ミヤコが思考の邪魔だからと便宜優先で行つていいだけらしい。アゼルは自立的に行動するため、時々ミヤコと相反する行動をとるが、それは承知のこと。

「そんな便利なもんじやないわよ、アゼルが降ろしてた悪魔を制御してくれないとアタシの体と心は乗つ取られる訳だしね」

『安心しろ、マスター。マスターがオレを楽しませている限り、オレがマスターを裏切ることはない。人から離れていくのならば、せめて人らしくありたいと立てた誓いを破ることがなければな』

「そとはいつても基準が曖昧すぎてどうもねえ」

「乗つ取られたらどうするんだよ?」

「どうしようもないわよ。アゼルが代わりに人格として現れて行動するのか、降ろしてた悪魔が憑依して活動するのか、どっちからしいけど。そもそもアゼルよりレベルが高い悪魔は降ろさないから、アゼルのさじ加減ひとつなのよね。まあ、どうしようもないわ、この力に目覚めなきやアタシは死んでたんだ。拒否権なんてある訳ないのよ、はじめからね」

「オレと一緒にか」

「あー、やっぱその傷がきつかけ?」

ミヤコの目線は頬を大きくえぐる悪魔の爪の痕に向かれる。反射的に緑色に発色するそれをなぞるナナシは、こくりとうなずいた。親近感が沸いたのかミヤコは笑う。

「ここまで来てわかつたと思うけど、南砂町つてあの橋と地下鉄を歩かないと脱出できないでしょ? ターミナルなんて、設置されたのフリンが来てからだもの。もし、閉じこめられた人たちがいたらどうなると思う?」

「面倒なことになるな」

「でしょ？外は悪魔が闊歩してる。人外ハンター商会なんてない。もちろん悪魔に対抗できる人なんていない。ここに閉じこめられてもみなさいよ。正気でいられるわけがないわ。ま、つまりはそういうことよ。だからみんな、あつちを日指したのよ」

ミヤコが指さしたのは巨大なアミューズメントパークである。食料や物資はここより豊富にちがいない。

「それでも25年も経てば物資が尽きてくるわ。そのうちみんな限界を感じたらしくてね、争いが耐えなくなつたのよ。ところで天王洲の事件は知つてる？」

「天王洲？天王洲つてあのやたら遺物がでてくるターミナルか？あそこつてなんかあつた？」

「あー、やっぱ知らないんだ。ま、簡単に言うなら、あそこの人たちも外に出られないままシエルターで25年も過ごしたから気が狂つちやつたのよね。食料も尽きて、飢えた人たちは、一番手短なところから食料を得ることにしたのよ。ただ精神的に耐えられないから、牛頭の魔神を崇めて貢ぎ物を捧げることでそのオゴボレという形でね。牛の神を崇めていながら牛を食べるつておかしいと思わない？」

「おかしいな、それ。普通、避けるだろ」

「そ、つまりはそういうことよ。必要だから作つたわけ、神様を。そしたらマジもんの神様が降臨したもんだから。いよいよみんなマグネットタイトの供給ラインになつちやつたみたいでね。今となつてはルシファー勢力に1体追加されちやつたつてわけ。言えるわけないわよね、これは牛の肉だつていうしかないわよね。アタシたちの世代は牛の肉の味をしらないわけだから？」

「似たようなことが起こつたのか、アンタんどこにも？」

「そーいうこと。見たらわかるけど、このあたりの悪魔つて桁違いに強いでしょ？一緒に逃げたお父さんもお母さんも成す術がなかつたわ。アタシだつてアゼルが応じてくれなきや死んでたわ」

「そーか」

「うん、そう。実力付けて帰ってきたわけ。あのときひどい目に遭わせた奴らがどうなつてゐるか興味半分でね。見ての通りもぬけの殻だつたんだけど。悪魔に襲われたのか、逃げたのかはわかんないけど・・・・・たぶん、死んだんでしょうね。一応、生まれ育つたとこだし、離れがたいからここにいるのよ、アタシ」

「ふうん」

ナナシは落胆する自分に気づいていた。ミヤコはナナシの姉ではなさそうである。

## 第6話

ナナシがアキラの夢を見るとき、判断に必要な情報はすべて頭の中にある状態で始まる。

今日のアキラは悪魔討伐隊に入隊したばかりの新人だつた。

入隊理由は忽然と姿を消した姉を探すため。遊びに来ていたから、すぐ隣の部屋で寝ていたはずなのに気づけなかつた。音沙汰ない警察からの連絡。疲弊する祖父母。あることないこと聞いてくる友人、近所の人。心配してくれる人。どうしても諦めきれず、個人的にいろいろ調べて回ついたら、深入りするなど突然現れた悪魔に殺されかけた。頬に消えない痕が残つた。悪魔から必死で逃げ回つていたアキラを助けてくれたのは、病室で目を覚ましたアキラをみて安心してくれたのは、タダノヒトナリだつた。開口一番、アキラを待つていたのは謝罪だつた。

黙つていたことがある、と言われた。そして、シユバルツバースの真実をアキラは知ることになる。悪魔が跋扈する異空間でタダノは選択を迫られた。天使勢力に組みして、文明を放棄して神を盲信する人間になるか。墮天使勢力に組みして、力を盲信する人間になるか。どちらにもならず、人間でありつづけるか。タダノの親友たちはそれぞれ天使、墮天使側につき、シユバルツバースから脱出して世界をそれぞれの思想で染め上げる使者となる道を選んだ。タダノは人間としてシユバルツバースに脱出する道を選んだ。アキラの両親は天使側についた。真実をしる人間がいては困る。どちらの陣営からも狙われ、生きるために戦つた。両陣営のリーダーになつていて了親友たちに手をかけたそうだ。リーダーを失つた彼らの混乱に乗じてシユバルツバースを脱出し、国連に報告、シユバルツバースは人間の持つあらゆる手段によつて消滅した。よつて、アキラの両親の生死は不明、もし生きていたとしても天使側の人間ということで非合法な形で抹

殺されることが許されている。かつてのタダノの親友は、天使と合体して人間をやめ、贊美歌によつて人を洗脳する蓄音機と化した。感化された人間も蓄音機となり、ゆるやかに人は人ではなくなる。タダノは手を下したが、それは半人半魔だからできたこと。死んだ人間を復活させることなど彼らにはたやすい。タダノがチカに二度と教会に近づくなと言つたのは、贊美歌に反応したから。贊美歌が聞こえる人間は天使たちが好む魂のあり方をしている。チカは天使たちに誘拐された。そう言われたのだ。

アキラはタダノの推薦で悪魔討伐隊に入隊することになる。年齢や性別を問わず、才能がある人間ならば誰でも声をかけていたのだ。天使側についた人間が真っ先に標的にするのは同じ環境で育つ可能性の高い家族である。タダノが躊躇しなければ、アキラもチカも悪魔討伐隊に入つていただろう。チカが誘拐され、アキラが殺される基準は不明だが、入隊条件である悪魔召還プログラムの起動に成功した。しかも中学生ながら頭角を表すのが早かつた彼の片鱗を見たのかかもしれない。

国連との仲介役で世界を飛び回るタダノは一緒にいられない。よつてアキラにはタダノのかつての同僚であり、自衛隊から加盟したある男が指導役兼目付役としてつけられた。アキラがツギさんと呼ぶことになる男、今の人外ハンター商会創設者の一人、その人である。

ナナシはアキラと呼ばれる。さつさと起きろと怒られる。ナナシはそれを当然のように受け止め、あくびをしながら起きた。

「緊急だ」

「どうしたんです、ツギさん。今日は非番でしょ？」

「緊急？なんだ、いつものことですね。キヨハルさんがまたどこかに行きました？それともケンジさんが奇襲に？」

「昨日の今日だ、さすがにアイツラもおとなしくしてるだろう。今日は違う、繭を見に行くぞ、アキラ」

「え、繭？・どうして？」

ナナシは背筋が寒くなる。

この世界のアキラは、東のミカド国で王様になる運命のアキラではないようだ。世界はゆるやかに終わりに向かっていて、人は少しでも長く生き延びるために懸命に戦っている。あまりにも絶望的な世界だとナナシは悟る。

フリンによく似た青年がアキラの記憶にいない。ケンジは墮天使の、キヨハルは天使の啓示を受けて、悪魔討伐隊が分裂するところまでは同じだが、アキラやツギたちは止めることができなかつた。天使は殲滅され繭は落ち、チカは繭の中で腐り落ちて死んだ。その反撃に天使勢力に墮ちた某国の核兵器が落ち、シエルターにいた人間以外は全滅。東京は放射能に汚染され、人間はいよいよ地下でしか生きられなくなる。ケンジは悪魔と合体することで難を逃れ、地上で活動しているが、レジスタンスであるアキラたちと食料を奪い合つている。キヨハルは信仰していた天使たちからの答えが核兵器という事実に耐えきれず精神が崩壊し、周囲の苛烈な攻撃に耐えられずおかしくなつてしまつた。放射能の影響か、地上で悪魔があふれすぎたせいのか、日に日に悪魔が強くなつていて。

アキラが地上で活動できるのは、ケンジと同じ悪魔と合体する道を選んだからだ。地下でしか生きられない人間目当てに襲い来る悪魔人間に対抗するには、手段を選んでいられなかつた。人から離れるのであれば、せめてあり方だけは人でありたいと願つたアキラだが、一見すれば悪魔人間となんら変わらない。合体した日からアキラは悪魔討伐隊の仲間以外と交流するのをやめた。悪魔討伐隊で一番小さかつた子供である。その人となりは保護下の人間は誰もが知つてい

る。気にしなくとも、とかつての記者は笑うが、アキラは首を振った。半分悪魔になつたアキラには、目の奥にあるおびえが感知できてしまふ。それがつらかつた。

「最近、やたらコーパスが出るつて話は前しただろう。発生源を探つたら、例の繭だと判明した」

「ほんとですか」「ああ、間違いない。諜報班が特定した情報だ、信憑性は折り紙付きだ」

ナナシは沈黙する。ツギさんは心境をおもんばかりて深入りしない。

コーパスは複数のゾンビが融合した塊だ。複数の頭が存在するものの、それぞれの意識は自分と他人の区別が付かなくなつており、ひとつ意識になつてゐる。個人のつぶやきが常に響きわたり、そのつぶやきに対する感情がまるで自分のことのように同調してしまふ。個人でりながら一つの意識になつてしまつてゐる苦悩がいつもうめきとなつて漏れ出る。解放してやるには物理的に跡形もなく消失させるのが一番だ。呪殺攻撃の射程にさえ入らなければ、それほど驚異ではない。ゾンビである以上、弱点が多岐にわたる。

近頃、コーパスの自撃例が多発していた。特定の悪魔の大量発生は異変の兆候だ。異臭騒ぎがするたびにコーパスの徘徊が目立ち、その範囲が拡大してるとなれば早急にたたく必要がある。

冷たい手で心臓を握られた心地がする。ナナシはガントレットを起動させ、魔法攻撃が得意な悪魔を編成する。シユバルツバース調査隊から受け継がれた悪魔召還プログラムは改良が重ねられ、民間人も使いやすい形になつた。悪魔討伐隊が組織される直前にネットにばらまかれた事件でスマホにもインストールできるようになつたが、

放射能に汚染され、ケンジ陣営にジャミングされる環境ではこちらの方が安定する。

久しぶりだ。

繭の中で腐り落ちた人たちを回収し、埋葬したあの日以来ナナシはあの場所に足を踏み入れることになる。

周囲は腐敗臭に満ちていた。足の踏み場もないほどのコーポスたちであふれている。どの悪魔も繭を目指して列をなし、どんどん取り込んで巨大な水たまりがうごいているような錯覚さえ覚える。蠢く不気味なうめき声に耐えきれず、アキラは焼く。シユバルツバーツ調査隊から引き継いだ過酷な環境でも生きられる装備で武装したツギさん、同行した悪魔討伐隊の面々が悪魔を呼ぶなり、異世界魔法を使うなりして焼いていく。蒸発していくコーポスたち。しかし、繭を包围するように中心に向かつて進み続けるコーポスたちはあまりにも多く、数が足りない。

アキラはコーポスたちの声が聞き取れるが、繭に近づくにつれてそれより大きな音が耳を犯す。それは鼓動だった。心臓のように脈打つ繭の鼓動だった。あるいは動搖を隠しきれないアキラの心臓の音だつたのかもしれない。

「どうした、アキラ。真っ青だぞ」  
「ツギさん、やばいです、これ」

「なにか聞こえたか」  
「生まれる、んじや、これ」  
「生まれ、なんだって？」  
「繭が、どくんどくんて、いつて……」  
「おい、あき」

音が聞こえなくなつた。

あれだけうるさかつたコーヒースたちの声も、ツギさんの声も、仲間の声もなにひとつ聞こえない。ただ響きわたるのは、産声。断末魔にも似た甲高い女の叫び声。アキラはその声を知つていて、いつも悪夢にみたから知つていて、

いつも悪夢にみたから知つていて、

どうして助けてくれなかつたの。

どうして殺したの。

アキラ、アタシのこと嫌いだつた？

そういうつて腐り落ちていく姉の亡骸を抱いて、崩れ落ちて号泣する夢ばかり見るからイヤでも覚えていて、もう25年も経つていてのにはつきりとわかるのは、それだけ大好きなお姉ちゃんの声だつたらだ。

アキラは泥に引きずり込まれた。ゆるやかに溶けていく四肢を見て、繭の近くにいたコーヒースも、ツギさんも、仲間たちも溶けていつたのだと悟る。アキラもそうなる運命だと悟る。懸命に抵抗するが、すべては闇の中に溶けていく。知らせなきやいけない。この泥が地下にまで入り込んだら危険だ。悪魔も人間も悪魔人間もすべて溶けてしまう。キヨハルやケンジに知らせなくては、その意識だけが最期の思考だつた。

『アキラ？』

降臨した繭の女が探し求める存在は、もうこの世にはない。

そしてナナシは目を覚ます。心配そうな顔がのぞいていた。

「おはよう、ナナシ」  
「・・・・・はよ」

「ずいぶんとうなされてたけど大丈夫?」

「大丈夫じゃねーけど慣れた」

「あはは、なにそれ。そうは見えなかつたけど」

飲む?と茶色い液体で満たされたカップを渡される。一発で目が覚めるわよ、と進められる。食欲をそそる香りにつられて口を付けたが、あまりの苦さとえぐみに体が拒否反応を示してせき込む。あーあー大丈夫?とはじめからその反応が来るとわかつていていたようで、楽しそうな笑みが浮かんでいた。

砂糖と牛乳の代用先はつつこまないのが暗黙の了解だ。正体を知つて喉を通らなくなることは餓死を意味する。もう一度差し出されたカフエラテのレプリカと焼き目のついた紫色のパンを差し出される。間には悪魔の肉が挟まっている。ずいぶんと奮発したようで、ケツトシーは取り分が減つたとしょぼくれている。詰め込めるだけ詰め込んだナナシは、身支度を整える。

「今日はどうすんだ?」

「んー、そうね。とりあえず、状態異常と呪殺に強くて、炎の魔法が使える悪魔を調達するわ。降ろさないと」

「は?・アンタ、悪魔召還プログラム使えないんだろ?・どうやつて?まさかオレの仲魔よこせつてか?」

「まさか、さすがにそんなことしないわよ。はじめから召還されてる悪魔はその限りではないみたいだし、そもそも悪魔召還プログラムを使つてなきやいいわけでしょ?・ちょっとしたツテがあるのよ。ナナシにも教えてあげるわ。言つたでしょ?・生きて帰れたら紹介してやるつて」

## 第7話

ミヤコにつれられて、ナナシがやつてきたのは銀座だつた。神の御業戦争前は歴史のある商業地区であり、高級歓楽街でもあつた銀座は、かつて明治という遙か昔の都市計画が残る優雅な雰囲気の街だつたらしい。格式や伝統にこだわりすぎた結果、高級ブランド店や老舗が建ち並び、時価も高いことで有名だつたらしい。アートの街とも呼ばれ、大小さまざまな画廊が集まり、その数は世界一とうたわれたことがあつたそうだが、今は昔の話である。その名残だろうか、複数の地下鉄が乗り入れていた関係で地下街はすさまじい広さを誇り、様々な商店が軒を連ねていて。

たとえば、かつては邪教の館とよばれ、今は業魔殿と呼ばれている悪魔合体を行う専用の特殊な施設。悪魔合体のアブリの主であるミドーによく似た老人を立派な額縁で飾つているそこは、ヴィクトルという何年立つても外見が代わらないことに定評がある眼力の鋭い外国人の男がオーナーをしている。表向きはホテル、もしくはターミナルを保有する巨大な客船を利用した海上ホテルを運営しているが、巨大な合体施設を有しているため、もっぱら宿泊するのは裕福層のクライアントやハンター商会などの重役達。会合に使用されているようだ。ミヤコ曰く、ここはチャネリングなどを利用して召喚する守護霊や守護天使の能力を向上させる数少ない施設であり、よく利用しているという。ここでは悪魔を愛用する武器と合体させることで属性を付与したり、特定の悪魔に対する対抗策を作成するのに重宝しているらしい。

ミヤコが受付を顔パスで通り抜け、慣れた足取りで豪華絢爛な螺旋階段を上つていくと、真っ赤な絨毯の先に豪奢な扉があらわれた。その傍らにはメイド服をきた無表情の女性がたつていて、美人だがあまりにも冷たい印象を受けるのは、血が通つていらない真っ白な肌のせいだろうか。

「お久しぶりでございます、ミヤコ様」

「久しぶりね、メアリ。オーナーはいる？」

「申し訳ございません、マスターはただいま大事な案件を抱えておりまして数日戻らない予定です。お急ぎですか？」

「あ、そうなの？ 残念。まあ、いいわ。他で調達するから。ねえ、こないだ頼んでたのできるかしら？ 取りに来て欲しいつて連絡あったと思うんだけど」

「はい、こちらでお預かりしておりました武器の新調が終わりましたので、お返しいたします。少々お待ちください」

ペコリと頭を下げ、機械的に微笑んだ彼女はくるりと後ろを向くと奥の扉に入つていった。

「なあ、ミヤコ」

「なに？」

「あいつ、悪魔？にしてはマグнетタイトが少ないけど。でも人間じゃないよな？」

「お、さすがは神殺し。マグネットタイトで判別するとか悪魔じみたことするわね」

「これが一番楽なんだよ、人間に化けるやつもいるから」

「なるほど。じゃあ教えてあげるわ。あの子は造られた悪魔、通称造魔つて呼ばれているお人形さんよ。いわば使い魔ね。こここのオーナーは優秀な悪魔合体士でね、悪魔と人形を合体させて生命を作り出すことにご熱心なのよ」

「へえ」

「いろんな組織が合体施設を造つたり、秘術を研究してるけど、やっぱここが一番精度的に安定してるのよ。うーん、いつもはここで悪魔を降ろしてるんだけど当てが外れたわ。降霊の術はヴィクトルじやないとできないのよね。仕方ない、別のところに行きましょう」

「じゃあヴィクトルって奴が武器合体もやつてんのか？」

「いいえ、それはムラマサつて人が担当してるわ。職人気質だから気に入られないとやってくれないけどね。気になるなら、ハンター商会でムラマサさんが悪魔を求めてることがあるから受けてみたらどう？なんかいもやつてれば顔なじみになつて造つてくれるようになるわよ」

「ふーん、そっか。わかつた、覚えとく。俺は魔法が主体だからあんまり使わないけど、槍とか使う奴いるしな」

「仲間想いね」

「ちげえよ」

くすくす笑うミヤコにナナシは目をそらした。しばらく待つているとメアリがミヤコの武器、いくつかのガラスでできたケースを差し出してくる。それを受け取ったミヤコは、業魔殿を痕にした。

ミヤコがいく店はブラックカードがなければ、門前払いをくらう店ばかりだった。

悪魔や悪魔召喚士を相手にマグネットタイトの売買を行う特殊な店、生体エナジー協会。かつて魔界でのみ流通していたマツカという通貨は、文明が崩壊して25年たつ東京ではかわりに流通しているのだ。本来、生体エネルギーであるマグネットタイトは電気のようあものでためておくことができないエネルギーなのだが、ここでは特殊な方法でストックをためることができるのだ。悪魔を倒したあと、その残滓をスマホに吸収することができるのはこの技術の応用だといわれている。大穴があき、月齢が復活した東京では今まで枯渇など心配しなくてよいから悪魔達は月齢によつて必要なマグネットタイトが変動するようになり、その価値が増している。一定しない悪魔のマグネットタイト量は召喚するときの枷にもなりつつある。ストックはあって損はない。もつとも、常時ダグザというケルト最高神の眷属という状態であるナナシには不要な心配だ。あるいは金に困つたときの最終手段で自身のマグネットタイトを売るということも可能である。ミヤコは苦笑している。駆け出しの頃はよくここにきてくれたと店主は笑っている。マグネットタイトの枯渇は悪魔にとつて死活問題である、最悪、ここで金を払えば消滅は免れるのだ。まさに地獄も金次第である。

あとは、いつもナナシが利用しているヒールスポートである、回復ポットではなく、正真正銘の回復に特化した施設があった。神話世界の悪魔達が地上に進入してきたとき、壊滅的な悪魔の活動により竜脈が活性化、かつて奇跡を起こした聖地が復活したらしい。回復の泉の精霊はそこを守護する者である、とよく利用するのによくやくその正

体を知ったナナシは、その豊満な体の女性はすさまじい年上だとしつて絶句している。驚くところが間違っているとミヤコは笑つた。その聖地の管理者である精靈や神靈にマグネットイトを与えることで回復力を利用できるのは当然のこと。ナナシのよく利用するところと違うのは、回復に必要な特技を持つている悪魔を強化できることだ。ナナシが食いついたのはここだつた。

さつそく召喚した回復要因の悪魔を預け、お金を払う。強化して欲しいスキルが提示され、レベルをあげなくともいい快適さにナナシはうれしそうだ。お金はかかるが、ミヤコはそれくらいなら、とブラックカードを出してくれた。これはミヤコとクエストをこなすときは必ずこなければいけないとナナシは密かに決意する。よこしまなガツツポーズに隠れてないわよと苦笑いしてミヤコは先を促した。

ハンター商会や阿修羅会とはちがつた繋がりから武器や防具、特殊装備を販売している店、チエーン店のかいつでもどこでも同じ店主がやつているという薬局。今回は特に用はないとミヤコはスルーしたが、どうやら一定以上のランクのハンターでなければ入れない会員制のクラブやバーがあるようだ。ミヤコの財布には高級会員制クラブのカードがあつたはずである。お酒が飲めない年齢にはまだ早いとミヤコは笑うが、文明が崩壊してからはや25年である。法律もないと思うのだが、その時代を知る人間がまだ生きているのだ、しばらく20歳以上は飲酒禁止という文化は続くだろう。

いつもとは違う雰囲気の店を練り歩き、はやくハンターランキングをあげたくなつてきているナナシにミヤコはつれてきた甲斐があつたとうなずいている。焚きつける意味もあつたし、気分転換の意味もあつたのだ。そしてミヤコはようやくお目当ての店を見つけたらしく、入つていく。ナナシも後に続いた。

「やあ、ミヤコちゃん。久しぶりだね、元気そうでなによりだ」  
「氣さくに話しかけてきた男性に、ミヤコはどもと笑う。

「そこにいるのはミヤコちゃんの彼氏かい？」

「なにいつてるんですか、マスター。せめて弟でしょ」

「いやわかんないぞー、君はあれだろ？最近噂の神殺しくん。それくらいの実力者ならミヤコちゃんのお目にとまるんじやないかい？」

「冗談も休み休みいつてよ、マスター。今、大事な任務中なんだから」「ああ、わかつてゐる、わかつてるとも。ミヤコちゃんがここにくるのはたいていそういう時だからね」

マスターはナナシにウインクする。なにしてんの、とミヤコはあきれ顔だ。たしかにミヤコの言うとおり食えないおつさんである。

そこは悪魔の流通を取り仕切つてゐる業者の組合だつた。そこで行われてゐるのは悪魔召喚プログラムのネットワークを持つ者達だけが許されている仲魔の売買だ。その仲介をしてゐる者達の集まりなのだ。方法は2つある。相手が提示する金額を支払い悪魔を買う方法、もしくは売る方法。そして相手が指定した悪魔を提示することではじめから提示されてゐる悪魔入手できる交換を前提にした方法。ここで人気があるのは「特定の強化系魔法を得意とする悪魔」や「特定種族の悪魔」、「非常に珍しい悪魔」である。報酬として追加で悪魔やお金をもらえることもあるそうだ。悪魔召喚プログラムが使用できない今、後者の方法は停止状態である。悪魔召喚士ばかりの店である。致し方ない。ミヤコが選んだのもやはり前者の方法だった。「状態異常と呪殺に強い悪魔がほしいわ。できれば火の魔法に特化したやつ。お金に糸目はつけないから、できればレベルが上限のものをお願い」

ナナシは目を丸くした。ここにつつこみに定評のある相棒がいれば、悪魔合体で今まで稼いだ金を一瞬で一桁にかかるリーダーがいうことじゃないといつてくれただろうが、残念ながらここにいるのはナナシだけである。店主はいつものように従業員に指示をとばす。どうやらミヤコはいつもこういうおおざっぱなオーダーをしているようだ。

悪魔を降ろして戦う特殊な体质のミヤコである。憑依させる悪魔は高いレベルの方がいいに決まつてゐるが、なんとも豪快だ。ナナシ

は思わず笑ってしまう。30分ほどしてマスターが提示してきた金額は、目玉が飛び出るほど高額だつたのである。